

体験を《なぞる》、世界を《なぞらえる》

——「他者理解」をめぐる交差するアートと社会学——

慶應義塾大学 澤田唯人

1. 背景と目的

「誰かの経験を、別の誰かに伝える」——社会学で取り組まれてきたライフストーリー研究やナラティブ・アプローチのモチーフを、仮に一言で表現するならば、このようになるかもしれない。この非常にシンプルにもみえる営みをめぐって、近年、アートを用いた調査表現 (Arts-Based Research: ABR) が注目を集め、さまざまな試みがなされはじめている。

しかし、調査研究において〈他者〉と出逢い、そこで語られた経験や調査過程そのものの経験をアートとして現実化する試みは、いかなる意味において社会学でありうるのだろうか。またそれは、従来の方法論よりも、どのような点で優れているのだろうか。本報告の目的は、しばしば ABR へ向けられるこれらの問いに対し、社会的な認識論 (「多元的現実論」) といくつかのアート実践に関する具体的な考察を通じて検討していくことにある。

2. 課題と方法

アートと社会学の実践的な相同性に立ち還るとき、両者はともに、自己や他者が生きた一回性の経験を、「別の」時空間に「別の」素材を用いて〈再現する〉営みとして位置づけられる。A. シュッツによれば、「社会 (科) 学の世界」とは、日常言語から比喩的に派生したテクニカルターム (演劇、構造、システム、ゲームなど) を用い、自他の経験世界を別の時空間に再構成した比喩的現実である。そして、アートにより表現された世界もまた、舞台やギャラリーなどの異なる時空間に、機材や道具、身体という素材を比喩的に用い、一回性の経験を〈再現する〉営みのひとつにはかならない。こうした自他の経験世界を異なる時空間に異なりながらも置き換える (= なぞらえる) という実践は、「他者理解」をめぐる何をもちこたすことになるのか。本報告ではこの点を、アートワーク (箱庭や絵画など) を通じた他者理解の技法を先導的に用いてきた精神科臨床での事例を手がかりにひも解いていく。

3. 結果と結論

アートによって作られる《なぞらえ》の世界は、かつて他者によってそこで生きられた身体性をも受け手に喚起しながら、自己と他者が「同じ」景色を共有していくことを可能にする。他者の経験を理解するということが、他者をひとつの対象としてまなざす対峙の関係からではなく、他者のみている世界をその他者のようにみようとすむ並ぶ関係からこそうまれるのだとすれば、そのような他者の経験を《なぞる》という追体験的理解は、アートによる《なぞらえ》の世界の創出によって豊かなものとなりうる。他者が生きた世界との《なぞらえ》の関係に身を置く者にとって、それはもはや鑑賞の対象ではなく、ともに眺め、ともに生き、その物語を《伴走する》ことに開かれた社会的参与の知として生きられるのである。

〈参考文献〉

荒井裕樹, 2013, 『生きていく絵』 亜紀書房。

本嶋学, 2000, 「現象学的科学論のレトリック的転回」 『現代社会理論研究』 10: 109-20。

最相葉月, 2014, 『セラピスト』 新潮社。